

SNS における居場所についての一考察

大 熊 隆 照

1. 本研究の目的

本研究では、昨今多くの人によって利用されている SNS における居場所について、それがどのように構成されているかについて、探索的に検討することを目的とする。

2. 先行研究の概観

2-1. 「居場所」に関する研究の変遷

近年、居場所に関する研究は盛んになっている。居場所に関する本格的な研究が始まったのは今から約40年前にさかのぼる。杉本ら（2006）によると、不登校問題の増加により、1980年代にフリースクールを始めとした学校外での「居場所」づくりが注目され始めた。しかし、石本（2009）によると、この段階での「居場所」という概念は「学校外の行き場」という空間の意味が大きく、居場所づくりとは実際に空間を用意することを伴うものであった。「居場所」には物理的側面の意味合いと心理的側面の意味合いの2つがあるとされているが（中島、2003）、当時のフリースクールといった学校外の「居場所」というものはこの前者にあたるものであった。

その後、登校拒否問題及び不登校問題への対応が大きな教育課題となり、文部省が平成元年に「学校不適応対策調査研究協力者会議」を設立した。そこで登校拒否児童生徒に対する対応の在り方について議論が重ねられ、文部省の田中（1992）によって最終報告書が取りまとめられた。その最終報告書では、登校拒否はどの子どもにも起こりうるものであるということを前提に、この問題に対する学校での取組のひとつとして、「学校が児童生徒にとって『心の居場所』（児童生徒が存在感を実感することができ、精神的に安心していることのできる場所）としての役割を果たすこと」（田中、1992）が挙げられた。この報告書を受けて、フリースクールなど学校外の居場所だけではなく、学校内における「心の居場所」を作っていくことへの注目がされ

るようになっていった。

石本（2009）によれば、「居場所」という言葉はそれ以前にも心理的な意味合いで言及されたものはあったものの、文部省の報告書において「心の」という言葉が「居場所」という言葉に付いたことによって、それまで言及されてきた「居場所」に比べるとより一層心理的なものとしての意味合いが強調されるようになったとされている。

また同じく石本（2009）は、この文部省の報告書がきっかけとなって徐々に居場所に関連する研究や実践報告などが増えたことにより、「居場所」という言葉が表す意味であったり、居場所問題が論じられる分野や対象とする年齢がそれぞれ拡がりを見せるようになったりしたと述べている。実際、中島ら（2007）は新聞記事における「居場所」というワードの登場時期とその頻度について、また、辞書・辞典における「居場所」の定義の変遷についてまとめている。その結果によると、新聞記事においては、「居場所」というワードが1980年代に登場し、1990年代には登校拒否・不登校の増加に伴い、登場頻度が増加していることから、「居場所」に関する記事の増加には「登校拒否・不登校」問題が影響を与えていることが示された。また、辞書・辞典における「居場所」の定義の変遷をまとめた結果では、2000年以前に発行されたものには、物理的な側面だけでの記載にとどまっていたのに対し、2000年代以降に発行されたものでは心理的な側面も盛り込まれるようになっていていると述べられている。このような経緯で「居場所」は従来の物理的な意味合いだけにとどまらず、心理的な意味合いを持つ概念としても取り上げられることが増えていったのである。

そしてこれらの「居場所」に関する研究は、それと同じような概念が海外にはないことが度々示唆されている。杉本ら（2006）は、「日本で現在使用されているような、心理的側面を含めた意味での『居場所』は、言葉の概念自体がないために、研究は行われていない」と述べている。また則定（2008）も、『居場所』という言葉は、『place』『room』『whereabouts』といった語に訳されるが、これは身の置き所を指し示すもので、これ自体に心理的要素は含んでいない」ということを説明している。これらのことから、心理的な意味合いにおける居場所に関する研究は海外にはない日本独特な研究分野であることがうかがえる。

2-2. 「居場所」の定義について

居場所の研究は多くなされているものの、現時点において心理的な概念としての「居場所」に対して一義的な定義のようなものは確立されてはいない。研究者によってとらえる側面が多種多様なためである。

「居場所」の定義に関して、中島ら（2007）は「居場所」を物理面・心理面の両方から捉えることを前提として、「居場所」の概念を「他者から認められたり、他者からの自由になって

自分を取り戻したりして得られるような『自分を確認できる場所』と定義している。また、それに加え、「他者との関わり」という人間の持つ重要な要素を1つの軸として、居場所には「社会的居場所」と「個人的居場所」の2つがあることを明らかにした。中島ら（2007）の定義では、社会的居場所とは「他者との関わりを持つことで自分を確認できる場所」、個人的居場所とは「他者との関わりから離れて自分を取り戻せる場所」のことを指しており、どちらの居場所に関しても人間が生活する上では所有していることが必要であると示唆されている。

また、居場所を研究する分野でも定義に違いが見られる。中島ら（2007）によると、建築学や住居学系の分野では、定義が明らかにされている研究がそもそも少なく、されていたとしても物理的な側面からしかとらえていないと述べている。一方、社会学や教育学系の分野では居場所の定義に「心」「安定」「安心」「やすらぎ」といった言葉の含まれた心理面から捉えた定義が多くあることも述べている。

実際、則定（2008）は物理的な居場所とは区別した上で心理的な居場所について注目している。そして心理的居場所を「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」と定義した。また、石本（2008）も、教育や臨床心理学など現場に関わる分野では、居場所は「ありのままで受け入れられるところ」という、居場所の心理的側面に注目した一定の共通理解が得られつつあると述べており、徐々に研究の分野においても共通の認識になりつつあることが示唆されている。以上のようなことから教育や臨床の現場における心理的な居場所への関心もさらに高まりつつあることがうかがえる。

いずれにしても一義的な定義は現時点でもなく、定義の曖昧さが居場所研究において、ひとつの課題でもあり、逆を言えば様々な研究を生み出している理由ともいえる。

なお、本研究においては居場所の定義は行わない。上記で述べたように、居場所の定義は一定程度の共通理解が得られつつある要素はあるものの、一義的に定まっているわけではない。本研究の目的はSNSの居場所がどのように構成されているかを検討するものであり、居場所の定義を定めてしまうことで、調査協力者の経験や語りから見出される要素を捉えることができなくなってしまう可能性がある。そのため、本研究では居場所についての定義は行わず、個人の経験や語りから見出される要素を居場所として重視していくものとする。

2-3. 居場所のなさに関して

浅井（2013）は前述の文部省の報告書で指摘されている学校内での「心の居場所づくり」の必要性や重要性はもちろんのこと、社会の中に適切な自分の「居場所」を見出すことが人々にとって切実な課題となっていると述べているように、何らかの居場所が人にとっては必要になっていると言えよう。このように現代における社会的な課題として居場所の重要性が叫ばれて

いるのだが、その社会的な課題に至らしめている裏にはそれと対を成すように居場所のなさというものが挙げられる。

居場所のなさが顕著に表れてくるのは青年期とされている。富永ら（2003）は、青年期は子どもから大人への移行期であり、その時期の青年は自分を保つために他者との交流の中で分立していなければならない、その中で自分らしくいられる居場所というものが獲得しづらいと述べており、発達段階として居場所のない感覚というのはある一定程度必然的に伴うものであるとされている。そうした他者と自己との関係性が特に取りざたされる青年期においては、居場所の存在が他の発達段階に比べ、より一層重視され、もがきながらも居場所とともに青年期の困難を乗り越えていくと考えられる。

2-4. SNSの台頭について

ところで、今日においてインターネットは人々の生活に深く根付いている。それはデータからも示されており、総務省（2023）によると2022年の個人のインターネット利用率は84.9%にも上っている。2000年代以降インターネットが急速に発展・普及するなかで様々なスタイルのオンライン・コミュニティが生まれた。

その中でも近年では1人1台スマートフォンを所有するような時代となり、LINEやX（旧：Twitter）、InstagramをはじめとするSNSという媒体が多くの人に利用されるようになってきた。SNSとは「ソーシャルネットワーキングサービス（Social Networking Service）の略で、登録された利用者同士が交流できるWebサイトの会員制サービス」（総務省、2013）のことである。総務省（2023）によると、その利用率はインターネット利用者の内、80.0%であり、さらに年代別で見たとき最も使用率の割合が高い年代は大学生・大学院生が含まれる13～19歳、及び20～29歳の年代となっている。その割合について、13～19歳の年代では92.0%と最大の割合で、次いで20～29歳の年代では91.7%の割合となっている。この調査結果の割合からは、10代及び20代の年代のほとんどの人たちがSNSを利用していることが分かる。

したがって、10代、20代の年代の人々にとっては、SNSはなくてはならないツールであると言えるだろう。このようなSNSの普及率は年々上昇の一途を辿っている傾向があり、今後さらなる利用の拡大が予想されるであろう。

2-5. SNSにおける居場所の可能性について

こうした近代のSNSの台頭、ひいてはインターネットの台頭により、居場所についての研究を行っていくにあたっては、そこに生まれる空間のことも考慮しないわけにはいかないように思われる。藤原（2010）は、今後子どもの居場所等について研究を進める場合、ヴァーチャ

ルな世界の居場所を無視して研究を進めることはできないのではないだろうか」と疑問を投げかけており、やはり、居場所に関する研究を行う上では重要な視点であると位置づけられる。

また、石井（2011）は SNS の特徴を「強いつながりの SNS」と「弱いつながりの SNS」の 2 種類に分けて検討を行っており、「強いつながりの SNS」は個人情報の開示度が高く、SNS での友達を増やす効果よりも、既知の友人とのつながりが大きいこと、その一方、「弱いつながりの SNS」については、個人情報の開示度が低く、ネット上の対人関係とつながりが大きいことを示唆している。このことから弱いつながりのある SNS においては現実場面における人間関係とは別に、ネット上での相手との交流も盛んにおこなわれていることが言える。

SNS での交流に関して、石本（2008）は現代青年が SNS や電子掲示板の普及に伴って、実際に顔を合わせたことのない友人を持つことは珍しいことではなくなったと述べており、併せて、ネット上での居場所に関しても、家族関係や恋人関係に居場所がないと感じるとネット上の友人関係への居場所を求める可能性があることも示唆している。また藤野（2017）も、ネット上でも人とコミュニケーションをとったり、人との関係性が生まれたりすることを考えれば、概念的にはネット上でも居場所を得られることは妥当であるとした。実際、内閣府（2017）が行った調査によると、インターネット空間に対して居場所を感じるという人は 62.1% だったという結果も出ており、半数以上の人たちが一定程度そこに居場所を見出していると言える。

さらに、SNS ではないものの木内ら（2008）は、ケータイメールの使用が多いほどネット上での自己開示、対面上での自己開示が多くなり、親密性が高まる、あるいは、ネット上での自己開示から直接親密性が高まっていき、親密性が高くなることでさらに使用するようになることを示唆している。ここから考えられることとして、そのような円環的な影響のひとつとして弱いつながりから徐々に強いつながりへと関係性の変化が促される可能性がある。すなわち SNS も居場所づくりとしての一端を担っているのではないかと考えられる。

こうした昨今の SNS の普及を受け、厚生労働省（2020）は、平成 30 年度より SNS 等を利用した相談事業を立ち上げ、問題の深刻化を未然に防止するための数ある幅広い相談窓口のひとつとして、いじめや不登校といった問題に対する相談を行っている。上記の事業の一端を請け負っているのが一般財団法人全国 SNS カウンセリング協議会である。一般財団法人全国 SNS カウンセリング協議会の行っている SNS を用いたカウンセリング事業、SNS カウンセリングについての報告を参照すると、SNS による相談は従来の電話による相談に比べ、その相談件数が 26.4 倍にもなったことが示されている（一般財団法人 SNS カウンセリング協議会、2018）。この結果からは、従来の電話相談だけでは、若者の相談ニーズをカバーすることが難しくギャップがあること、さらには SNS を活用したそうした相談に対するニーズが若者にとって高まっていることがうかがい知れる。すなわち、SNS も心理臨床の世界の中で少しずつ相談者にと

っての居場所のひとつとしてなっていく可能性も秘められているということでもあるだろう。

とりわけここ数年のことを挙げるのであれば、新型コロナウイルスによる感染症の影響によって、SNSなどの非接触型のインターネットツールを活用したコミュニケーションの機会も以前に比べ、格段に増加・普及したと考えられる。実際、畑山（2020）は新型コロナウイルスの禍中における学生たちの交流に関する調査を行っている。その結果によると、新型コロナウイルスの禍中においても、「#春から〇〇大」といったハッシュタグなどSNSに内蔵されている検索アシスト機能を利用して大学の知り合いを作った学生たちや、サークルの新入生歓迎会で同回生や先輩とのつながりを持てたという学生たちの回答が見受けられている。したがって、コロナウイルス禍中であつた中でSNSは一定の心の拠り所として機能していたことが言える。

以上のような観点からも、SNSという媒体が従来の居場所に留まらない形での居場所となる可能性があり、SNSにおける居場所がどのようなものであるのかについては考えていく必要がある。

3. 先行研究の問題から見る本研究の位置づけ

上記で述べたように、SNSにはひとつの居場所としての可能性が期待されている。しかし、これまでの先行研究はSNSにおける居場所について分析している研究は少なく、分析していたとしても現実場面における居場所感と同じような捉え方がなされているものがほとんどで、まだその実態はあまり明らかにされていない。藤原（2010）も居場所の定義についてまとめる中で、扱った個々の居場所の定義にはヴァーチャルな世界の居場所、特に携帯電話等に関する定義や項目が全く含まれていないことを問題として挙げている。

また、三浦（2008）によると、ネットコミュニティにおけるコミュニケーションは対面でのコミュニケーションとは異なる性質を持っていると述べていて、筆者が卒業論文で行った調査でも同様の可能性が示唆された。卒業論文では、研究の一部で浅井（2013）の作成した尺度を基に、現実場面での基本的居場所感とSNSでの基本的居場所感の比較を行った。卒業論文の研究時は、居場所感を同じ側面から捉えて比較する特性上、同一因子による解釈が適当と判断し、先行研究にならった1因子構造での比較を行った。しかし、尺度の検討時にそれぞれを因子分析にかけて分析したところ、前者は4因子、後者は3因子が抽出され、異なる因子構造を有していると推察された。

このことを踏まえると、それぞれの居場所感を構成している潜在的な要因は若干異なっていることが考えられる。SNSにおける居場所がどのようなものかを明らかにすることができれば、今後居場所づくりの一環としてSNSにはどのようなものが求められるのか展開していくひとつの手がかりになると考える。

以上のことから、本研究では SNS における居場所について、それがどのように構成されているかを、質的データより分析し、探索的に検討していく。

4. 方法

4-1. 調査対象者

本研究では、SNS を使用している割合が特に多いとされる10代、20代の大学生、大学院生を調査対象者とする。表1に調査協力者の概要を示す。

表1. 調査協力者の概要

調査協力者	所属	利用しているSNS
Aさん	大学生	LINE, X[旧Twitter], ゲーム
Bさん	大学生	LINE, X[旧Twitter], Instagram
Cさん	大学院生	LINE, X[旧Twitter], Instagram
Dさん	大学生	LINE, X[旧Twitter], Instagram
Eさん	大学院生	X[旧Twitter], Instagram, TikTok
Fさん	大学院生	LINE, X[旧Twitter], Instagram, Facebook, Last.fm, Studyplus

4-2. 調査方法

6名の調査協力者に45分～60分程度の半構造化のインタビュー調査を行った。リサーチ・クエスションとして「SNSの居場所が成り立つ要素はどのようなものがあるのか」「SNSの居場所のなさにつながる要素とはどのようなものがあるのか」を設定し、以下の質問項目を設けた。

- ① 居場所が「ある」、もしくは「ない」という感覚がこれまであったか、またそれはどのような感じであったか？
- ② SNSはどんなものを使っていて、どのように使っているのか？
- ③ SNSを使う中で居場所が「ある」、もしくは「ない」と感じる経験や体験が現在およびこれまでを振り返ってどのようなことがあったか？
- ④ SNSにおいて居場所がないと感じる際、どのようなことがあれば居場所があると感じられると考えるか？

①の質問項目は、インタビューの導入にあたり、調査協力者が居場所に関してイメージしやすいように設けている。②の質問項目については本研究の特性上、インタビューするにあたっては調査協力者の SNS の利用状況を踏まえることが重要であると考え、設定した。③の質問項目は本研究のリサーチ・クエスションを反映させたものである。④の質問項目については、SNS に対して居場所を感じないという語りを想定し、それらをカバーしながら、SNS の居場

所を検討するために設定した。

4-3. 分析方法

IC レコーダーで録音したインタビュー音声を逐語記録として書き起こし、逐語記録の中から、SNS における居場所に関する語りに着目し、佐藤（2008）の質的データ分析法である定性的コーディングを行い、より抽象度の高いカテゴリーに分類した。

定性的コーディングは膨大な逐語記録の文字テキストデータに対して、一種の小見出しとも言えるコードを付けていく作業である（コードがつけられている逐語記録はセグメントと呼ぶ）。これによってできたコードはその後のデータ処理を容易にする。すなわち逐語記録というデータの情報量がコードを付与されることで圧縮されるため、データとして扱いやすくなるのである。また、定性的コーディングの場合は、コードを割り当てたセグメントやオリジナルの逐語記録に幾度も立ち戻って文脈を確認することができる。言わば可逆的に圧縮されたデータを何度も展開することが可能なのである。質的データは多くの文脈の中に存在する語りをデータ化したものであり、これらの作業によって、対象者の語りの文脈をより忠実にデータとして反映することができる。

本研究では、SNS 利用率が高い大学生、大学院生の SNS における居場所についての語りをデータとして扱い、SNS の居場所がどのように構成されているかを検討していくことが目的である。そのため、上述の佐藤（2008）の定性的コーディングの特徴を踏まえ、本研究の研究方法として妥当であると判断した。よって、本研究では定性的コーディングによる分析を行い、結果の整理を行った。

5. 結果

5-1. SNS の居場所の成り立ちの要素

SNS の居場所の成り立ちの要素として【存在の受け入れ】【現実での満たされなさ】【SNS ゆえの安心感】【SNS 内外の関係性】という大きく 4 つのカテゴリーに分類された。カテゴリーにはサブカテゴリーを一部含んでおり、個々のカテゴリーの詳細を以下、表 2～表 6 にて示す。なお紙面の都合上、本稿ではセグメントを一部抜粋して掲載する。

表 2. 存在の受け入れ

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	語り
存在の受け入れ	他者からの応答	A15	結構頻繁に、愚痴じゃないやつを投稿したりしてたんで、それに対して自分もこういうことがあったみたいな返信とか、リプライが飛んでくると、あ〜居場所あるなみたいなのは感じたことはあります。
		B13	インスタなんかも、ストーリー上げて誰が見たのかも見れて、あ、見てくれてるんだかと思ったり、いいねもらったら、あ、これよかったんやなとか思ったり。
		C22	特に別に内容がなくても、それこそ文章のラリーが続いていれば、それだけでもなんか感じるっていう感じです。
		D14	その人の「こういうところがすごい好きや」とか、「この舞台のこういうところがすごい良かった」みたいな話をしてたら、いいねとかリブとかで反応をみんなくれて、「分かるよ」みたいな感じになるから、
		E31	普通に投稿して、「わかる」って返したりとか。だから、ほんとに軽いノリでできるし、まあリアクションなんか来るっていうのは、そうですね、リアクションがなんかあったから居場所っていうか、そうなったのかもしれないです。
	自分の意見への共感	A33	大変やったとか、まあ、似たようなことがあったとか、そういう感じの、まあたわいない話ですけど、そうですね。で、相手の方も自分の今日あったことを話して、みたいな感じのやり取りがずっと続いてたって感じですよ。
		B16	結構あのスタンプとかを収集するクセがあるんですよ。LINEのスタンプで。で、なんか結構前の期間限定のやつやったらしくて、「それいいじゃない！」みたいな、「持ってんの!?すごいね!」みたいな言われて、すごい嬉しかったのは覚えてますね。
		D36	ちょうどなんかみんな色々、SNS上ではみんなわかってくれるし、自分も話せるし、聞いてくれるみたいなので、そういうところも、結構なんか居場所っていう感じがするなって思ってた
	自分の存在の認知	B37	現実だと、割とシャイであんまり自分から行けない感じがあるけど、そのまあ、インスタの誰が見てるかにしろ、なんか目に見えてわかる、承認されてる感じが、それがなんか、あ、なんかいいなって思いますね。
		C17	LINEとか通して話してるだけでも、結構なんかもうそれは、1対1の関係になるんで、すごい自分の存在もそこにあるような感じもするし。なんでまあ居場所って考えるのかどうかわかんないけど、なんか安心できるような、そんな繋がりがみたいなのは、すごい感じますね。

表 3. 現実での満たされなさ

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	語り
現実での満たされなさ	現実場面での語しづらさの発散	B15	α(Bさんの好きな漫画)とかが好きなんです。α(Bさんの好きな漫画)は結構昔のやつだし、そんなにワンピースとかに比べて人気があるからと言われるとそうでもなくてみたいな。だからあんまり周りで話せる人がいなかったりして。で、探して見つけて、あーいいなと思って。
		C29	話す内容っていうのも、結構もう、何も考えないというか、もう結構自由な感じに話してる感じもあるというか。なんか本当に、あのリアルに、まあほんとに日常的に会う友達とかだったら、あんまり話さんとこう、みたいなところもあったりとかであるけど、なんかそのネットとかだったら、結構自由に表わされるなみたいな、そんな感じもあるしで、
		D35	リアルの友達とかで、その人のことを知ってるというか、なんか、その人のことを好きな人とかもあんまりないし、知ってるって言う人すらいらないみたいな感じやって、で、話せない。
		D37	なんか聞いてはくれるけど同じ熱量じゃないし、なんか別に अच्छي شيء ことをずっとこっちが一方的に喋ってるのも、なんかあんまりよくないじゃないですか、やっぱり。ってなると話せないし、話さなくなるみたいな。
		D45	Twitterやったら、その好きなことを言っても大丈夫な場所やから、そういう話でずっと盛り上がりえるみたいな。
	素の自分の出しやすさ	C31	別に特に着飾らないでいいというか、もう本当にありのままでその関係が築けるっていうところで、そっちの方が、ほんとにもう、自分のままで関わりながらその関係が続いていくみたいな、そんなところの方で安心感というか、まあ繋がりの方はそっちの方が感じやすいですね。
		E35	私も気を使わなかったんで。まあ最低限の礼儀ぐらいでしたね。まあTwitter、まあ鍵アカでも一応TwitterはSNSだから、ちょっと個人名でできるだけ出さないとか、まあそういったことはもちろん気は使んですけど。まあそれ除いたら、割と素を出せるっていうか。素を出してやり取りができるから、居場所あるかなっていうのは。
		E39	でも、SNSの人は割とそこまで気使ってなかったんかなって。傍から見ても、通話とかSNSの人とやってるのを、まあ部屋が隣なのでよく聞こえてくるんですけど、そっちの方が素で喋ってる感じがしたっていうのはありますね。

表4. SNS ゆえの安心感

カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	コード	語り
SNSゆえの 安心感	選択できる 安心感	いつもと違うキャラ	A39	人に合わせて話してましたね。別に自分の好みとかを、まあ積極的に話すかっていうよりは、相手の話に相づち打ったりとか、あ、俺もそれ好きみたいな感じで、同意したりとかしました。んへ、まあ当時、相手に好かれたかったのかなと思います。普通に仲のいい友達として好かれたかったからこそ、好みとかも合わせたように話をしていたのになって思います。
			B34	オープンチャットの、なんかその誰か、僕が誰かわからないんで、まあその、いつもと違うキャラで行きますし。
			B11	オープンチャットなんかは、やっぱり好きな話ができるんでやってて楽しいし、みたいな。
			C30	自分が自由に表現しながら、向こうもそれで話続けて、で、それがずっと続いているからこそ、そっちの方が、安心できるのかな、というのはありますね。
		話題性の自由さ	D12	居場所があるっていうのが、さっきまで言ってたように、同じ趣味で同じものが好きな人たちが集まる場所やから、自分も「これが好き」みたいな感じで、ちょっと自由に話せるみたいな場所が、居場所やなっていうのは感じます。
			D51	好きなことを自由につぶやけるといいうか、害がない程度、他者を害さない程度で、その好きなことについて、話せる場所であれば、それと同じような感覚を持った人たちが、集まってくるんかなっていうのは思います。
			B09	テーマで、あの一区切られてるんで、それで、自分が好きなところに入って、ちょっと話合ったら嬉しいなっていう。
			F48	SNSやったら、それこそ嫌な人おったらブロックもできるし、ミュートもできるし、シンプルに離れるっていうことができるんで、やからその、なんか自分がどうするかっていうのを選ぶ可能性みたいな違いがあるかなって思います。
		コミュニティの 選択性	F50	その人と繋がりたいと思うかどうかでも大事ですね。やっぱり、興味なかったら、そこに参入していかないと思うんです。
			A50	ちゃんとなんか言葉にして吐き出すと、自分の中で整理がつくというか。なんかもう、モヤモヤが形になって出てくるんで、ちゃんとその事実を受け止められるというか。
	枠による 安心感	文字媒体の特長	D42	Twitterやったら文章のところが結構大きくて、結局なんか長く喋るとか、結構言いたいことがある時はTwitterとかになっちゃって、で、その好きなものとかやったら、結構喋りたいからTwitterみたいな。
			A11	(鍵アカは)まあ、つぶやくみたいな。まあ、口にしまふようなことを言う場所ですかね。
			B32	オープンにできたりとかも色々あるとは思んですけど、普通に怖かったぐらいですけどね。SNSには割と昔から抵抗があって、だから鍵アカでインスタとか始めたのも大学入ってからで。普通に知らない人に見られるのはちょっと怖いなって思ってますね。
			E29	鍵外したら、あんまり自分のこと出せないなって、出したら怖いなって。第三者が見れるわけだし、鍵アカだったら、まあリスクが全くないわけじゃないですけど、他人が見れないから身内ネタも言えるし、こっちのことも言えるして、だから割と気兼ねなく話せる。
		非公開アカウント による安心感	F32	公開アカウントやけど、そん中で鍵になっているみたいな感覚があったんで、なんか一時そのサークルにしているけど、全体に公開されちゃうバグみたいなあったんですけど、なんかそれもだんだんそういう噂も聞かへんくなったんで、やっぱり普通にそこで安心して使ってたね。
			D53	なんか分散させるっていうのも手かなっていう。いろんな居場所を作っておく。そしたらもう1個なくなっても、まあ、まだあるしみたいな。
		複数アカウントによる 使い分け	F33	普通にツイートの内容を分けてる。なんか言いやすいことは、公開アカウントで、言いづらいこととかは鍵アカで、みないな使い分けはちょっとありますね。
			A52	まあ顔とかかわからないので、ああいうのって顔とか名前とか。気軽に本音を喋りやすいのかなとも思ったりします。
	匿名性ゆえの 安心感		B19	寂しいなって思ったりとか誰かと喋りたいなって思った時とか、匿名なんで、なんか割とちょっと変なこと言っても、自分ってバレないから言いやすいし、みたいな。

表5. SNS 内外の関係性①[現実とのつながり]

カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	コード	語り
SNS内外の 関係性	現実場面への 居場所の拡張	現実場面への 居場所の拡張	D08	顔も知らない人。顔を後で知るといいうか、その、仲良くなって、たまたまそのやっているアカウントが、その、趣味のやつなんですけど、その趣味の現場で、そのTwitterで仲良い人たまたま日程が合うと顔を合わせるといいな。
			D26	全然会わない人とかもいるんですけど、やっぱり、そのSNSだけでの友達みたいな人も、いるんですけどやっぱりいい人とは、「実際に会って喋りたいか？」みたいな感じになって、
			D40	ストーリーとか見てDMが飛んできたりとかして、そっからなんか喋って、「久々に会えん？」みたいな感じになるような人もいたりとか。
			E36	SNS上でも、Twitterとか配信とか、なんかそのネット上でのやりとりですこいわけわちゃや、それこそ身内のノリで割と喋ってるし、そこからスタートでオフ会とか、実際にリアルに会いたいな。だからSNSが先にあるなって感じが、そっからリアルに行ってるなって感じがあるなと。
			F39	同じ学部には同級生じゃなかったんで、だから、1から作るみたいな感じやあって、やけど、なんか同じ学科の人を中心にフォローして、もう入学前から仲いい子できて、で、それで入学式で会いたいのはあって、だからあんま大学でも、友達作り、そんな困難さえへんかったなみたいな感じやあって、
			A51	現実の方で、まあそんなに充実してなかったりとかしたら、高校の時も、まあその部活に入ってなかったりとかして、まあそんなに、まあ現実の方に居場所を感じなかったりとかしてたら、まあ今もずっと、ゲームの方に浸ってたかもしれないです。現実が充実してないことが必要ってわけじゃないんですけど、まあその方がまあ、居場所になりやすいのかなって思ったりします。
		現実場面の 代替の選択肢	B33	現実世界というか、で、ないって感じには思っていないで、まあちょっとなんかあの、味方というか、そんな感じで使ってるイメージがあるかなと思いますね。
			E38	彼の同期だった人たちはもう1個上の学年になってるしってなったら、他の人とリアル会うタイミングないだろう、なかったらどうなるっていうのは。だからなんかよりゲームの方、SNSの方に力を入れてったかなっていう。自然と。
			E41	リアルに居場所を求めない状況だったら、そうなるのってっていうの。うーん、そうだなあ、前提条件が違う感じがするっていうのはありますね。
			F41	コロナ禍の時は、なんか、それこそ結構、なんか自分が同じ学科の人のと繋がりが欲しいみたいな風になってたのもあったりとか、なんか、みんな新入生困ってるよな、みたいなところがあって、なんか新入生の子をフォローして、なんか仲良くなったりとかして、っていうのはありましたね。
	現実場面と 同様な感覚	現実場面と 同様な感覚	A19	ゲームに誘ってくれるのはもちろん、なんか、友達みたいな感じがして、まあ、楽しかったし、まあ、居場所あるなって日常の自分を、そのネットの方でも着飾ってるみたいな、そんな感じで、なんでも、でもそれがもうネットの方ではないというか、もう本当に、このネットで話してる今が、もうリアルっていう感じになってくるんで、もうなんか、ありのままでもいいかみたいな、そんな感じで、もうかなり自由な感じっていうので、そういうのはありますね。
			D24	普通にずっとおんなじ感じのま。会った後も会う前もずっと同じテンションで喋って、会ったままキャッキやるみたいな。
			D39	結構その中学とか高校とかの人とかやったら、あんまし、その繋がりに連絡取るとか、そういうわけでもないような人とかも、近況を伝える、「元気にしてるよ」みたいな感じで、もうあげたいのをあげるみたいな感じで、
			E16	今は卒業みんなしたんで、まあ今は居場所っていうかみんなどうしてるかなっていうのを知るツール？きっかけとして、まあたまたまそれを見て、「え、今度はじゃあそこ行こうや」とか、誘ったり、なんかするきっかけにはなってるけどっていう感じかなと。
		旧友との 関係の持続		

表6. SNS 内外の関係性②[つながりの契機 / 関係性の深まり / つながりの拡大]

カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	コード	語り
SNS内外の 関係性	つながりの 契機	同じ共通点を持つ人の存在	A34	向こうも僕と年齢がちょっと近かったのもあって、なんかまあ結構合う、帰りの時間とか、まあその、ゲームをやる時間とかが一致してたっていうのもあってか、結構頻繁に遊んでたかと思ってます。
			C50	話があった人と話が続いたからこそ、今も話せるみたいな、そんな感じなんで。んーなんか、でも本当にネットだと、本当にそれこそもう、いろんな人いるし、で、気が合う人さえ見つければ、ずっと話が続きそうってところ、
			D15	一緒に考えの人たち多いなみたいな感じになって、居場所やなみたいな、そんな感じですね。
			E15	Twitterで、それこそリアルアカはサークル仲間の子たちと身内ノリで、なんか変なこと言ったりとかしてて、だから、そういう意味で居場所感っていうか、
			F24	同じ共通点がある同士だと、結構、まあ結託感っていうのも生まれやすいかなっていう風には思ってた、
			F49	割と身近な共通点みたいな人が大事なんかと思ってて。その自分が同じ学科との子の繋がりを強く求めてきたのもそうやし、今もほんまに共通点があって繋がって、趣味で繋がって人が結構趣味アカの中心になってる。で、なんか自分にとっては身近な共通点、自分が持ってる属性が同じと人の繋がりが結構大事になっていう風に思ってますね。
		搭載機能による 交流の促進	A22	ゲームの中にTwitterとの、アカウントのリンクができるようになって、そこからフォローし合うみたいなことができたので、そこからまあ繋がって感じですね。
			B10	バスケット調べたら、中学生募集みたいな、高校生募集みたいな、そんなんが出てきて。でまあ、その人数とか出るから、まあ少なめのことか入るんですけど、しんどいから。で、何個か入って、僕はこんなんで、みたいな
			D32	検索とかタグとか、あとエゴサっていう、エゴサで名前を入れてツイートしたら、その名前とかで検索した人たちが目に止めてくれて、で、そのまんまフォローしていったりとかありますね。
			F35	公開アカウントの方やと、そのいろんな趣味の人がいるんで、だからその話をしたらそっちで色々反応くれるとか、公開やからそのタグ、ハッシュタグとかついたら、繋がってへん人でも反応くれたりとかするんで、
		手軽な結びつき	B22	急に誰かが「このテーマで話そう」とか言い出したりもしますし、「これどう思う?」とかって言い出したりして、それになんか便乗してってみたいな。
			C23	30分間あるとして、その中で結構いっぱい話して、で、もう時間になったみたいな感じで終わったりして、でもその間はすごい安心できる空間というか、その関係になったりはしますし、
	関係性の 深まり	共通部分以外での 親密度の深まり	D29	全然関係ないところで、全然関係ないつづきみたいな、その俳優さん関連じゃそういうので仲良くなったとか。
			F37	Last.fmから来て、Twitterから来て、インスタも繋がっていた人が、あと2人ぐらいいるんですけど、なんかその人たちは、要は自分のプライベートを公開していることになるんで、なんか結構自分のことは知ってくれてるかなって思います。
		他のSNS からの変遷	A30	ブレー中は、まあ、その相手がどう動くかとか、まあこういうことできるよ、みたいな感じですかね。そんなんが3分間やったんで、結構短いじゃないですか。だからそのゲームの中に、普段のこと話すとかはあんまなかったなって感じですよ。
			C34	ネットの中で、そういう人と話せるみたいなところがあったり、で、そういうところで1回話してて、で、そこからまあ、LINEに行ったりってところで、で、そこであ、LINEで話したりって関係になるみたいな、そんな感じですね。
			F19	Last.fmっていう音楽の、なんか自分の聞いた音楽を共有して、なんか人をフォローしたりフォローされたりみたいなサービスがあって、それを高校3年生の時からやって。で、そこでTwitterで繋がった人が数人、その趣味のアカウントにいて、みんなほんとんど外国人ですけど。
	つながりの 拡大	つながりの多様性	C51	いろんな人とも関われる空間がネットの中にあるだけでも、すごいもう居場所感じられる人があるというか、まあその中で多分、気が合う人を見つけることって、どこかでは可能だから、とにかくいろんな人とときと話せる場さえあれば、なんかその中で勝手に繋がって、繋がりができてるんじゃないかな、みたいな風には思いますね。
			D22	結構その世代とかもバラバラで、普通に日常生活だけを送ってたら、なかなか、その同じ熱量で語らないというか、語れないような世代の人とかも、その俳優さんの話とかを同じ熱量で話せたりとかするの、結構面白いなって思ってた。なんか母世代とか、おばあちゃん世代とか、それぐらいの人とも関わったりとかするの、結構面白い所がありますね。
			D23	いろんな面で自分より大人の人とかも、関われるので、なんて言うんでしょう、その幅が広がるという自分の、そういう人と話す中で視野が広がる、知識が広がっていくみたいな、そんな感じはします、結構。
		つながりのひろがり	D34	なんか仲間が増えて嬉しいなみたいな。あ、こんなに好きな人たちと喋れて楽しいな、みたいな感じでしたね。
			F38	高校入学の時やと「〇〇高校に入ると繋がりたい」みたいなハッシュタグがあって、それで、っていうか、元々その高校が中高一貫校やって、私は高校から入ったんですけど、中学入った時点で、小学校からすごい仲いい子がいたんで、だから、その子のリアルアカ経由で繋がった子とかもいて。だから、結構他の人より友達作りが困難せへん優越感みたいなのはあったりとかして。

5-2. SNS の居場所のなさへとつながる要素

SNS の居場所のなさへとつながる要素として【希薄な関係性】【信頼感の欠如】【SNS 内の動向への馴染みにくさ】【現実場面の居場所の充実】という大きく4つのカテゴリに分類された。個々のカテゴリの詳細を以下、表7～表10に示す。なお紙面の都合上、本稿ではセグメントを一部抜粋して掲載する。

表7. 希薄な関係性

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	語り
希薄な関係性	不安定な関係性	C24	なんか結構向こうの都合とかでも、ビツって切られると結構、なんていうか、まあ、それまで安心だったりしてたのが、もう本当にそれこそ、急になくなって、
		D46	やっぱり現実での居場所の方が、あの一、確固たるものというか、SNSとかやったら、最悪そのアカウント1つ消してしまえば全てが消えるから、なんか居場所って言っても、どこか薄い。
		E26	そういう浅い関係性の中で、なんだろう、まあそれで彼らは満たされてるんだろうけど、いつでもその関係って切れるし、危ういよなっていうのがあるし、永続的じゃないよなって思って、
		F46	会わへんくなった人は、なんかちょっと人間関係こじれて、もう会わなくなった、縁切ったみたいの人とか、あとはなんか向こうが、なんか知らんけど、もうなんかブロックしてアカウント消しちゃったとかありましたね。
	応答性のなさ	A40	なんか、こういうことがあったとか言うやつに、「良かったやん」みたいな感じで返信して、まあ返ってってこなかった時とか、うーん、ちょっと辛いみたいなのは感じてたりしてたと思います。
		C20	1週間とか結構空いたりして、で、それからまたやり取りが、送ってはまた期間空いて、送ってはまた、みたいな感じになってくると、なんかその時はなんていうのか、そんなに安心感も、なんかその、そういうのもなくて。なんかそれこそ、ただ打ってるだけというか、文字打って送ってるだけみたいな、そんな感覚になりますね
		E34	リアクションとかリプとかいいねとかしたら、まあ見てるよっていうものもあるし、「あ、わかるー!」とか賛同とか同意とか、なるけど、それがなかったら、ただ私が言ってるだけだしって。フォロワーがいても、そうだとしても、でもただ見るだけだから関わりはないって、ない証拠になる感じがして、居場所って言ったらないなって思っちゃう。
	単一的なつながり	A45	ゲームの中でしか繋がりのなかった人たちって、まあそんなに、実は繋がって濃くなかったのかなっていう、まあ認識に変わったんですよ。まあそういうのもあって、まあ、あんまりしなくなっちゃったかなっていうのは、ありますね。
		D47	楽しいし、同じ価値観で集まってるはいるけど、その部分だけで繋がってるというか。逆に言うと、現実やったら、その以外にもなんか色々複数のことが関係して、居場所の安心感とかってあると思うんですけど、やっぱりそのSNS上での居場所は確実なものじゃないというか。こじれやすかったりとかもするかなみたいな感じます。
		E24	SNSとか、それこそゲームで繋がった人とか、ゲームっていう共通のものがあるから、まあ仲良くしてるけど、それこそ姉とか見てたら、まあそこで繋がってるけど、後々なんか揉めたりとか、なんかそのゲームでそのチームのギルドの運営とか、なんか意見が割れたり、
		F45	割と他の学科の人やと、ちょっとよそしくそしくなっちゃったりとかはあって、で、会ったのが1回きりみたいな人もいましたし。逆に数回続いたけど、もう会わへんくなっちゃった、みたいな人もいますし、って感じですね。

表8. 信頼性の欠如

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	語り
信頼感の欠如	相手への信頼の乏しさ	A53	顔が見れるのと見れない人では、コミュニケーションの質というか、まあ取り方も違うし、自分の言葉がどう受け取られるのかなとか、まあありきたりの話ですけど。でもやっぱり、ありきたりの話やからこそ、まあ重要なことやと思うんで、ちゃんと顔見て、表情が見えて話せるのと、顔も名前もわからず、表情もわからずに、声だけで判断するのとでは、まあかなり繋がりの違いがあるのかなと思います。
		E40	根本的に自分とは違う人を演じれるっていうか、やろうと思えば。性別も変えられるし、それこそ自撮りで例えるんやったら撮る角度でも全然雰囲気は変わるし、詐欺れるなって思うし。そういう意味で言葉でもそういうことはできるなと思って。リアルだったらある程度取り繕えるけど、そんな全部が全部隠すのは多分無理だろうなと思って。どうしてもそこは多少は見えるし、疲れる時とかってなったら、そこは根本的に違くなって感じになって感じはしますね。
	個人が背負うリスク	B20	(匿名で) 情報はほとんど出さないですね。ちょっと怖いんで。
		E30	趣味アカとか鍵外してるんですけど、いろんな人が見れるわけだしなっていうのは。どんな人がいるかもわかんないし。まあスパムもあったりするしてなったら、ちょっと載せづらいし関わるのもちょっと躊躇しちゃうなっていうのはありますね。
		F22	同じ界隈に身を置いているからには、ブロックしてたらバレルんで、Twitterやと「○○さんはあなたをブロックしてます」って出るから。だからバレルし、多分この人柄やと、それに対してなんか言いそうやなっていうのがあったんで、だからそれでミュートで穏便に済ませとこうってことでミュートしました。

表9. SNS内の動向への馴染みにくさ

カテゴリー	コード	語り
SNS内の動向への馴染みにくさ	A14	ネットのノリとかって、あると思うんですよ。なんか、いろんなコピペがあったりとか、まあミームみたいなのがあったりとか、なんかそういうのをいっぱい使うような人たちとは、ちょっと距離置きたいなっていうのがあって。
	F20	当時ファンやって今も好きって言ってる人が若い人を叩くみたいなことがあって、Twitterで。で、それで、そのLast.fmで繋がった外国人のすごい仲いいフォロワーさんがいるんですけど、その人がなんか「マジこの空気なんなん?」って言っていて、私もそういう感じで、うわ嫌やわと思って、だからそれでそれに関するツイート減らしたりとか、もうそのコンテンツ自体がちょっといややなって思っちゃって、離れたことはあるんで、その時はなんか自分はどっちに立っていてもなかったんで、結構あの方は居場所感っていうものはなかったかなって思います。
	F25	その界隈で猛威を振るってんじゃないけど、なんかすごいこの人が、その界隈の代表みたいな人がいて、で、結構その界隈には女の人が多いけど、その猛威を振るってる人は男やから、結構、割と、なんか精密に完全に対立しているとは言えないけど、なんか「あの嫌やわ」っていう空気が完全に出来上がってて、

表10. 現実場面の居場所の充実

カテゴリー	コード	語り
現実場面の 居場所の充実	A43	もう部活の方に居場所を感じてたので、そう、こっちの居場所って、別にいらんなってというのは思いました。SNSの居場所についても、別にいいかなって思って、まあ鍵をかけたり、まあそんなにつぶやきもしなくなったっていう感じですかね。
	E28	Twitterとか、あっち比べてもう先にリアルで仲良くなってるから。なんかSNSだからっていう風にはあんまり思わなかったかなっていうのは。

6. 考察

6-1. SNS の居場所が成り立つ要素について

分析の結果、【存在の受け入れ】【現実での満たされなさ】【SNS ゆえの安心感】【SNS 内外の関係性】に大きく分類された。

【存在の受け入れ】【SNS ゆえの安心感】【SNS 内外の関係性】の3つのカテゴリーは、則定(2008)の「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」という心理的居場所の定義と重なる部分があると言え、大きな括りではSNSにおいても、居場所としての要素を含有していることが示された。一方で、【現実での満たされなさ】と言うカテゴリーは、〈現実場面での話しづらさの発散〉や〈素の自分の出しやすさ〉にあるように、日常の現実場面での人とは話しづらかったり、それによって素の自分を出しにくくなったりしている現状がある。それをSNSでは解消することのできる場所として機能しているということが示された。藤野(2017)は、インターネット上の心理的居場所感とメンタルヘルスの指標である心理的 well-being には相関がなく、インターネット上の居場所は個人的居場所に近いことを示唆している。これは本研究の結果とは異なっていて、【現実での満たされなさ】を解消することができるという意味合いではメンタルヘルスの向上につながる可能性が考えられ、量的な結果からは得ることができなかった新たな知見であると考えられる。また、個人的居場所は「他者との関わりから離れて自分を取り戻せる場所」(中島ら、2007)とされているが、【存在の受け入れ】【SNS ゆえの安心感】【SNS 内外の関係性】からも見られるように、他者との関わりによる居場所としての要素も持ち合わせていることから、社会的な居場所ということもできるだろう。

社会的な居場所という観点から見ると、【SNS 内外の関係性】に含まれるサブカテゴリーが要素として最も多く、4つの中カテゴリーとその下に11個の小カテゴリーが含有されている。SNSの大きな特徴として[つながりの契機]にあるように、ハッシュタグや検索機能により、同じ共通点を持つ人と思い立った際に手軽につながることができる。これを起点として、[関係性の深まり]のように、特定の人と密に関わったり、[つながりの拡大]のように更なる人との結びつきを生んだり、SNS内に留まらず【現実とのつながり】として、現実場面への橋渡し

の役割も担っていると言える。

他者との関係性を発展させていく中では、カテゴリーとして分類された【SNS ゆえの安心感】による作用があると考えられる。それらは普段と違うキャラになれ、自由にそのフィールドを採択できる[選択できる安心感]であったり、アカウントを非公開や匿名化することで、自分を見せる範囲を限定できたり、複数アカウントによって居場所を分けることが可能となる[枠による安心感]が影響していると言える。

Winnicott, D.W. (1965) は、「本当の自己」のみが実在感を持つことができるが、その「本当の自己」は外界の現実の影響を受けてはならないため、「偽りの自己」によって守りながら、陽の目を見れるような条件を模索していると述べている。すなわち、SNS が持つ匿名性やアカウントを自由に変更し、普段と違うキャラになることは、「偽りの自己」による「本当の自己」の感覚の獲得であると言える。SNS は、そうした活動を元々備わっている特長などを駆使することで容易に行うことができ、「本当の自己」を「偽りの自己」によって守ることができる安心感があると言える。そのような安心感があるからこそ、他者との関係をもつ社会的な居場所として成り立っていると考えられる。

6-2. SNS の居場所のなさにつながる要素について

分析の結果、【希薄な関係性】【信頼感の欠如】【SNS 内の動向への馴染みにくさ】【現実場面の居場所の充実】に大きく分類された。

【希薄な関係性】と【信頼感の欠如】は分類されたカテゴリーの中ではサブカテゴリーも含んでおり、SNS の居場所のなさに通ずる要素として影響を持つものと考えられる。これらは「6-1. SNS の居場所が成り立つ要素」で考察した、「偽りの自己」によってもたらされる弊害とも言えるだろう。〈相手への信頼の乏しさ〉や〈個人が背負うリスク〉からも見えるように、自分自身は「偽りの自己」によって「本当の自己」の感覚を獲得しながらも、その一方で、相手に対し、同様に「偽りの自己」を持ちながら接していると捉えるため、相手を懐疑的に見てしまうと考えられる。笹倉 (2011) は、SNS の中でも Twitter (現在はX) を例に挙げ、Twitter は「“自己”の多面性をなんとなく抱えてくれる『ゆるい器』」だと述べている。すなわち、SNS は「偽りの自己」を持ったもの同士がゆるくつながっている場所であると考えられる。そのゆるい結びつきが「本当の自己」の感覚を得ることで一部では深まったり、さらに広がったりしていく場合もあると言える。一方で、【SNS 内の動向への馴染みにくさ】にもあるように、SNS コミュニティ内の偏った動向に対しては、否定的な見方を覚える可能性がある。そうした際、【希薄な関係性】でも示されているように、SNS は応答がなければ途切れるし、自分が相手と合わなければすぐに関係を切ることができるため、必ずしも居場所としてならない

のだと考えられる。

そうしたゆるい不安定な結びつきに対して、【現実場面での居場所の充実】にもあるように、現実場面は SNS に比べてはより強固な居場所として機能するため、場合によっては現実場面での居場所が優先されるものと考ええる。

7. まとめと今後の課題

本研究では、SNS における居場所について、それがどのように構成されているか、探索的な検討を行ってきた。結果として、居場所として成り立たせている要素と居場所のなさへとつながる要素の両方が見出された。どちらもその根底にあるのは、現実場面とは異なる SNS が持つ性質や機能そのものが居場所を構成する要素としても重要なポイントとなり、「偽りの自己」によるゆるい関係性を起点として、ある人にとっては居場所になるし、ある人にとっては居場所のなさを感じることもなっていると言えるだろう。

従来の量的な研究においては、SNS ひいてはインターネットにおける居場所はひとりの個人的居場所として捉えられていたが、その世界の中では他者との関係が現実場面とはまた少し違った形で展開されており、ひとりでもいながらも社会的な居場所として場合によっては機能するということが、本研究にて明らかになった。ただ、本研究では調査者の所属大学に実際通っている学生、すなわち現実場面において社会的な接点をもつ方を対象に調査を行った。本研究の結果から、SNS においては、社会的に接点を持つことが難しい状態であっても居場所としてなり得る可能性が示唆された。そのため、社会的に接点を持つことが難しい不登校や不適応、ひきこもりの状態にある方への支援の方策のひとつになると考えられる。しかし、そうした方々にとって SNS が実際に居場所として成り立つのかは定かではない。

そこで今後の課題として、社会的接点を持つことが難しい方々にとっての SNS が居場所となる際、どのような体験や経験が影響しているのかについて研究していく必要があると考える。

引用文献

- 浅井美帆（2013）女子大学生における基本的居場所感の検討、金城学院大学大学院人間生活学研究科論集、13巻、pp.29-32
- 藤野千種（2017）SNS を介したインターネット上での心理的居場所と well-being の関連、神戸大学発達・臨床心理学研究、16巻、pp.14-18
- 藤原靖浩（2010）居場所の定義についての研究、教育学論究、2号、pp.169-177
- 畑山亘（2020）キャンパス：聞いてみました1年生交友事情、ネット駆使し出会い作る、毎日新聞 2020.9.29夕刊、p.7
- 一般財団法人全国 SNS カウンセリング協議会（2018）文部科学省実施事業「平成30年度 SNS 等を活用した相談事業」相談件数の中間結果ご報告、<https://smca.or.jp/core/wp-content/uploads/>

- 2018/10/pressrelease_20181011.pdf、(2024.01.09閲覧)
- 石井健一 (2011) 「強いつながり」と「弱いつながり」の SNS 一個人情報の開示と対人関係の比較一、情報通信学会、29巻 3 号、pp.25-36
- 石本雄真 (2008) 居場所感に関連する大学生の生活の一側面、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、2 巻 1 号、pp.1-6
- 石本雄真 (2009) 居場所概念の普及およびその研究と課題、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、3 巻 1 号、pp.93-100
- 木内泰・鈴木佳苗・大貫和則 (2008) ケータイを用いたコミュニケーションが対人関係の親密性に及ぼす影響—高校生に対する調査—、日本教育工学会論文誌、32巻、pp.169-172
- 厚生労働省 (2020) SNS 等を活用した相談体制の構築事業、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1401926.htm、(2024.01.09閲覧)
- 三浦麻子 (2008) ネットコミュニティでの自己表現と他者との交流、電子情報通信学会誌、91巻 2 号、pp.137-141
- 内閣府 (2017) 子供・若者の意識に関する調査 (平成28年度)、<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h28/pdf-index.html>、(2024.01.09閲覧)
- 中島喜代子 (2003) 中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」、三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学、54巻、pp.125-136
- 中島喜代子・廣出円・小長井明美 (2007) 「居場所」概念の検討、三重大学教育学部研究紀要、58 巻、pp.77-97
- 則定百合子 (2008) 青年期における心理的居場所感の発達的变化、カウンセリング研究、41巻、pp.54-72
- 笹倉尚子 (2011) インターネットを介した自己表現、心理臨床の広場、4 巻 1 号、pp.14-15
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法—原理・方法・実践—、新曜社
- 総務省 (2013) SNS (ソーシャルネットワーキングサービス) の仕組み、https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/security/basic/service/07.html、(2024.01.09閲覧)
- 総務省 (2023) 令和 4 年通信利用動向調査の結果、<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05a.html>、(2024.01.09閲覧)
- 杉本希映・庄司一子 (2006) 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化、教育心理学研究、54巻 3 号、pp.289-299
- 田中智雄 (1992) 登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して— (学校不適応対策調査研究協力者会議報告)、教育委員会月報、44巻 2 号、pp.25-29
- 富永幹人・北山修 (2003) 青年期と「居場所」、住田正樹・南博文編、子どもたちの居場所と対人的世界の現在、九州大学出版会、pp.381-400
- Winnicott, D.W. (1965) The Maturation Processes and the Facilitating Environment, The Hogarth Press Ltd., 牛島定信訳 (1977) 情緒発達の精神分析理論—自我の芽ばえと母なるもの—、岩崎学術出版社